





近く清むつうよ顔をこのみ
つらあむむとをゆきむらたらひ
出耳まらふも〜か海とつたハ實で
り〜妻々のるをさ〜のあ〜る〜
秋カよあ〜ことをねひより人の
耳目をにらる〜とにらみ出ること

岷江入楚

桐臺

第4

空蟬

夕顏

若紫

未摘花

紅葉賀

花宴

葵

賈平

苑散里

須磨

明石

冷標

蓬生

閑屋

繪合

松風

薄雲

槿

乙女

玉鬢芳

ノ二十二冊

如

得書角

寶枝

いながら僻事なりけり代の先達後
世はあつたはるをきくははる

くまふあ

六百番袂合

後漢判

七番 寄海窓

左頁

題昭

ふらふかに記海の心なる君はまの浪の心

判云左袂よりなるいさう万葉集より

あるうき若きことまの担袂所の

あつたにゆゆるのよふやゆるいゆ

はるうき記のゆ秦皇の蓮衣をに

くもた大奥を射るはる

師いともはるとそは記のあまうき

此歌ハ優艶なむとてその令
度幾と故人云令忍入事ある
為身在具要也

毎月抄

室家卿教訓

未練のやとわ日より詠なりは詠
詠なりと申す事ありつらき歌の

たやまのうらやまのうらやまのうらやま

ころもききと侍りるを歌なりと云

ちとよみ口なれは後い酒ぬるを歌む

時みよみなりゆき

詠歌一辨

室家卿述作

みよもすなむやすし歌をいす

横ありきよみかき

井蛙抄雜談

如何述作

戸部云家隆が井蓮の聲が寂蓮

相具しく大夫令和秋の才なりき

禪の秘中云け仁未来の秋仙は

名義の流ひに疑義なりきと云ハ

といふいひ秋よむき酒を記す

いふと傳ふようといふとを

秘感

不昧真院の府教訓 烏丸光宗云

常ありあるのよ名をほき

詞のよ優美に詠習所要也

常は不用見むつしき詠習用也

初志のよむつしき詠習優美よみ

心もさうく事成れば何事も
かたむくもするはうらな極みなり
心新を換へ心とさうして邪気
入の端なる習練つらうと常
影のうた優み心も一力あり
よみなすなりいたしむこと

題者何はえもよ海と半
依る習練も決中あり決中と海
ふれ歌ありねことな

かゝのこゝ毎に貴刺あり
信一あり

終枝



